

中日戯曲における異類婚姻譚

——『白蛇伝』と『娘道成寺』と『蘆屋道満大内鑑』をめぐって——

呉

艶

はじめに

伝説と神話と昔話の世界から、中国では、三国→唐、宋→清を経て、日本では、中世と近世を経て、文学作品が沢山誕生した。伝説と神話と昔話の主体となる「異類婚姻譚」の一部もこれらの作品に、

大きな影響を与え、更に、戯曲の題材を豊富にするのに大きな役割を果たした。異類婚姻譚は時代を辿りながら、素朴な言い伝えから、宗教的、倫理的思想を内包するものと変わり、更に、物語性が成長し、愛情をもテーマとして、取り上げられるようになってきた。その成長する過程において、特に、戯曲となって展開された異類婚姻譚は、そのモチーフが本来の意図から離脱し、時代思潮に沿うようになったものも少なからずある。異類婚姻譚は古く、かつあらゆる文化段階、諸民族の間に存在するものであり、日本と中国の同類作

品は、時代的にも、距離的にも互いに遠く隔たっているとはいえ、共通点が多く見られる。

一、異類婚と古典文学との関連

異類婚の戯曲における展開を考察するには、先ず、「異類婚姻譚」を究明しなければならない。これについて、野村純一氏がこのように語っている。「異類婚姻譚は昔話の一群を指す用語。人間と人間以外のものとの婚姻、もしくはその性的な交渉を基軸に展開する昔話群を言う。広く説話の一般にも適用される^①。異類婚の型を考察すれば、主に人間の女と異類の男との交渉を説く型、また、それとは逆に人間の男と異類の女との交渉を説く型の二つに大きく分けられることが分かる。内容からいって、前者は異類の智入りといった形式を取り、後者は異類の嫁入りといった形式を取る。「真の意味の

昔話はいずれも、婚姻と結びつく。婚姻譚は幸福な結婚に終わるものと悲劇的結末に終わるものとの二つの形式がある。後者の形式は人間と動物、もしくは超自然なものとの婚姻にみられるが……^②と関敬吾氏が語っている。日本の昔話の中で、動物が主要な行為者として現れ、いわゆる動物昔話が量に於いて、かなり多く、その内容も多様で、変化に富みかつ複雑である。動物昔話の中で、異類婚姻譚も多数を占める。

異類婚姻譚の最古の例が『古事記』に出ている。「三輪山神話」は人間の女性と異類との交渉を説くいわゆる異類智の最古の例である。この話は婚姻というよりは、むしろ異類との性的交渉をいつている。「豊玉昆売命の神話」は異類女房の最古の例である。この話は「三輪山神話」とは違い、異類との性的交渉だけでなく、豊玉昆売命とその夫の火遠理命の恋の歌は人間と異類との愛情を表し、恋愛をもテーマとして、取り上げられるようになった。

御伽草子において、有名な『鶴の草子』はその発端が昔話「鶴女房」型であると思われ、『蛤の草子』は昔話の「蛤女房」との交渉が注目されている。

狐の子孫と称して、狐妻の話を伝えているのは、古くは『日本霊異記』巻上ノ二「狐為妻令生子縁」に見える。この狐妻の話の中で、人間と異類との愛情も歌によって、表されている。

中国の六朝時代に多くの志怪小説、唐代以後に伝奇小説が生まれたのと同じように、日本近世に於いても、龐大な数の怪異小説が生まれた。上田秋成の『雨月物語』がその代表であるが、『雨月物語』には、中国小説を日本の話に翻案するものが多く見られる。近世の怪異小説が中国の怪異小説の影響を受けて、発生したと思われる。

『太平百物語』には、動物の怪事が圧倒的に多い。全体の三分の二が動物の話である。猫の話の中に、女に化けていた古猫がその正体を見破った男を恨み殺す話がある（巻二「本行院の猫女に化けし事」）。その他に、幽霊、異形のもの話も少なからずある。

『新御伽婢子』の第八話の「遊女猫分食」は猫の化けた美男と契ったということで、猫分と異名されて面目を失った遊女の話である。『拾遺御伽婢子』（『古今百物語』）の巻四「怪に逢うて淫欲を戒む」は一念発起、男が仏門に帰依して正道につくという話である。

日本近世の怪異小説の中に、『剪燈新話』『菴城録』『靈鬼志』『才鬼記』『今古奇観』などの中国怪異小説に拠ったものが多数を占める。異類婚の題材内容は多岐にわたり、中でも、幽霊説話が圧倒的に多いようであるが、動物説話も少なからずある。

一方、中国古典文学において、異類と人間との交渉は極めて古い時代に属するものである。その異類は動物である場合は、狩猟の対象として、家畜として、愛玩用として、また畏怖や嫌悪の対象とし

て、更に信仰の領域に於いて、人間と動物との関係は極めて複雑であり、話もまたこれを反映して、その内容は多岐にわたる。中国では、異類婚は昔から昔話の主要な題材となっている。

人間と異類との愛のテーマが、三国―唐、宋―清を経て生まれた文学作品の中で、よく見られる。異類婚説話が物語文学として、発展し、定着してきたことが分かる。『搜神記』だけでも、人間と動物・幽鬼との結婚、恋愛の話が多数見られる。

卷一 所載の神女が機を織って、董永の借金の返済を助ける話が京劇の有名な「天仙配」の原型である。これらの話は不思議さ、物珍しさが生命であり、新しい時代に即応したテーマが設定された。六朝志怪の中には、こういう意味での物語に類似する話もかなり多いようである。これらの話は人間と神女との交渉であるゆえに、不幸な結末に終わるのがつねであるが、その主題は広い意味での男女の愛情である。こうした異類との愛情を主題にする話が生まれたのも、この時代の人々の考えが変化し、男女の愛情といったものに価値を認めるようになり、異類婚を題材とする物語はすでに成熟したことを意味するのである。

「六朝志怪」には、人間が動物の助けによって、一家を興すという話が幾つか見られる。異類婚の話にはならないが、動物が人間を

助ける過程に於いて、動物のほうがいづも、人間の妻の役を演じる。卷五の謝瑞の話は日本の「たにしの女房」と同型の話である。『里見八犬伝』の始めのところは『搜神記』卷十四の「蛮夷の起源」に拠ったと言われている。

中国古典文学において、異類婚を題材にした話の中で、動物は時に畏敬や親愛の対象として、崇拜されたり、親しまれたりし、時に畏怖や嫌悪の対象として、恐れられたり、嫌われたりする。動物の精が人間を脅かし、危害を加えるとされる話も少なからずある。異類婚の説話・物語は次の幾つかの傾向の戯曲・小説に発展する。

*一 動物の精が美女に化けて、男を誘惑し、危害を加える話。
人間に嫌われ、恐れられる蛇や狐などが登場する。

*二 神女と若者の恋愛の話。天人が登場し、若者を助ける。結局上帝に命じられ、連れ戻される。

*三 動物報恩の話。動物が心の優しい青年に助けられ、美女に化けて、嫁に来る。

*四 幽鬼や植物の精と人間との恋愛の話。

*一としては、明の嘉靖年間に、洪梗が刻した『清平山堂話本』所収の「西湖三塔記」などがある。この「西湖三塔記」は拙論でこれから中心に論じる『白蛇伝』の原拠であるが、『白蛇伝』はその上、更に発展し、モチーフを明確にされたものである。

「南宋の淳熙年間（一一七四―一一八九）、奚宣贊という青年が清明節に、西湖のほとりで道に迷った白卯奴という名の少女を救い、これがきっかけとなって、少女の母で白衣の婦人、祖母で黒衣の老婆と知り合いになる。青年はその白衣の婦人と半月ほど同居するが、何と彼女に生肝を取って喰われようとする所を、あやうく少女に救われて家に戻る。一年余りのち、今度は黒衣の老婆と偶然であつたことから、無理やり連れ戻されて夫婦となり、半月後また取り殺されそうになり、同じ様に少女に助けられる。後に道士の叔父がこの三人を取り押さえてみると、少女は実は鶏の、白衣の母は白蛇の、黒衣の祖母は鰐の化け物であり、そこで三つの化け物を西湖の三塔に封じ込めた」。

それまで、かつては神霊の化身として、崇敬された動物は、この時代になると、人間に恐れられたり、憎まれたりするようになったようである。それまでの「人と異類が渾然一体となって、この世に生きている」という観念はだんだん薄くなり、人間がこの世の主体であると、思われるようになったのであろう。三国（唐（中世）から、宋（清（近世）まで、異類婚の話は伝説・神話から、だんだん恋愛文学に変容していき、ただの単純な昔話から、倫理・思想の宣揚の手段となり、更に、人間と異類との間の恋愛心理の描写により、人間同士の愛情を意味するようなものとなった。これは当時の封建

社会においての恋愛文学を補充するものとなつたと思えるであろう。これらの題材は中世以後誕生した中国戯曲の脚本の一ジャンルとなり、一般庶民に愛され、普遍的にその価値を認められている。

二、「白蛇伝」と「娘道成寺」と「蘆屋道満大内鑑」の成立

（一）、「白蛇伝」と「娘道成寺」

京劇において、異類婚の代表作は何と言っても、「白蛇伝」である。京劇の多くの異類婚の作品の中で、「白蛇伝」は典型的な異類女房の型である。「白蛇伝」は南宋の『清平山堂話本』所収の「西湖三塔記」に典拠するものであるが、明の嘉靖年間（一五二二―一五六六）の人、田汝成の『西湖遊覧志』巻三、「俗伝の湖中に白蛇青魚の両怪有り、塔下に鎮圧さる」と。というのは、極めて簡単な記述ではあるものの、この頃既に白蛇と青魚（「白蛇伝」の小青にあたる）がこの塔の下に閉じ込められたという伝承が形成されていたことを物語る。

「西湖三塔記」（前章で例に取り上げた）はただの動物が人間に危害を加えるという恐ろしい話である。「白蛇伝」の原型と言えるが、あくまでも、怪異を怪異としてのみ描く方向にある。男と「女」の出会いというロマンチックなものは程遠く、当時の青年の眼から

見ても、白衣の婦人は「女」としてではなく、妖怪としてのみ描かれているのである。

この白蛇の物語は明末に馮夢竜によって出版された『警世通言』の「白娘子永鎮雷峰塔」と「西湖佳話」の「雷峰怪跡」は「西湖三塔記」をもとに、更に大きな発展を遂げ、筋が複雑で、モチーフが明確なものに変わった。

「西湖三塔記」から「白娘子永鎮雷峰塔」まで、白娘子は人間に危害を加えるただの非情の異類から、愛情に満ちた人間性のある妖怪に変わってきた。その後、このストーリーの展開は、更に新しい動きが見られる。

清の方成培氏はこのストーリーをもとに、戯曲に改作した。改作された『雷峰塔伝奇』の中の白娘子に対して、我々は「畜生のくせに」と怒るよりも、人間の男に惚れて、人の世に惚れて、惚れぬいた女に同情したくなる。

その概要をみてみよう。

峨嵋山で長年修練した白雲仙は白蛇の化身である。人の世を羨み、杭州の西湖に来て、西湖で修練する蛇の精——小青と、美女とその侍女に化け、西湖で若い男の許宣と出会い結婚する。金山寺の法海和尚は仏戒——人と畜生は一緒に共にはいけないという掟を理由に、仲を裂こうとする。端午の節句、白娘子は雄黄酒を飲まされ、

正体を現す。許宣はそれを見て気を失う。白娘子は嵩山の仙人から還魂草をもらい、許宣の命を助ける。法海はあきらめず、許宣を金山寺に誘い、監禁する。夫を捜しに来た白娘子と闘い、最後に彼女を雷峰塔の下に埋める。

清代の初めに生まれた天の摂理・前世の宿縁という説は中国人従来の好きな考え方である。とにかく、二人が現世で結ばれるのも離れるのも前世の縁ということである。清にこのストーリーは相次いで戯曲の舞台で演じられた。戯曲に改作されたものは『雷峰塔伝奇』と大体同じ筋である。

このように、今日の京劇本『白蛇伝』は、以上触れて来た物語をもとに、いくつもの作品の積み重ねの上に形成されたものである。『雷峰塔伝奇』とくんだりは大體同じであるが、違う点は前世の因縁などという考えや鬼気や妖気などなくなったところである。特に、新中国の誕生（一九四九年）後の京劇本では、いろいろ話の展開があるが、民衆に最も喜ばれたのは、法海に代表される為政者の圧迫に抗して、自由と幸福をあくまで追求する二人の姿を描いたところである。皇帝、官僚の圧制に苦しんでいた民衆の気持ちが行われる次第である。

白娘子が妖怪としての要素を捨て、人間らしい愛情を備えるようになった。新中国の劇作家田漢氏（一八九八—一九六八）は京劇

『白蛇伝』の序で、「白蛇伝は中国の民間で、長い間流伝してきた神話物語である。それは、はじめは恐怖を我々に抱かせるような色彩をなお若干は帯びていたが、徐々に、優美なものへと変化し、物語の主人公は一層愛らしく、一層人々に同情されるに値する姿に変わってきたのである」と今日の『白蛇伝』の性質を語っている。^③

一方、雅文小説の代表作——『雨月物語』には、拙論の第一章ですでに述べたように、中国の小説の翻案ものが多い。そのなかで、最も良く知られた「蛇性の姪」は『警世通言』の「白娘子永鎮雷峰塔」と「西湖佳話」の「雷峰怪跡」から翻案されている。筋がほとんど同じものである。最後に、真女兒（白娘子）は法海和尚に調伏され、蛇の本身に戻らせ、鉢に収めて、「永久に世に出るな」と道成寺の堂前に埋められてしまう。秋成独特の筆の運びで不気味に仕立てられている。上田秋成はここで道成寺を邪淫を封じ込める仏門の代表にしているが、なぜここで「道成寺」が出て来たのだろうか。『白蛇伝』に貫かれている仏教的モチーフは秋成にヒントを与えたのであろう。

ここで、歌舞伎本において、唯一の蛇の話、女の執心と邪淫を描いた『白蛇伝』と同じ仏教的モチーフを持っている「道成寺物」に触れてみたいと思う。「道成寺物」は日本の近世文芸に著しい影響

を与えたものと言われている。「道成寺ほど、芸能や文芸の大きな流れになったテーマはない」と増田正造氏が語っている。^④歌舞伎の道成寺物は能の『道成寺』から出発した舞踏劇で、『白蛇伝』の、蛇が人間に化け、人間と契るのに対して、人間は男を慕い、その執心が怨念と化し、蛇になるという話である。日本の動物説話と近世怪異小説において、「人が蛇になる」ものも多く、これは他と違って、人間と蛇との特殊な相互関係が考えられるであろう。このような話はほとんど女性の執心の発現を多様に捉えている。蛇は恐ろしくて、執念深いイメージがある。

謡曲の『道成寺』の出典はもと僧鎮源が長久元年撰んだ白本法華験記から出て、今昔物語集・元享釈書、道成寺絵詞などに伝えられているものである。伝説文芸として、『今昔物語集』の文をあげれば、その巻十四「紀伊国道成寺僧写法花救蛇話」に出ている。

原典の『今昔物語集』の描く若い未亡人の愛欲を、謡曲の『道成寺』の中で、無邪気な少女の一念に変更された。

『娘道成寺』は歌舞伎の道成寺物の決定版で、その筋は、道成寺伝説の後日譚ともいべきもので、白拍子に化けた清姫の亡霊が道成寺に鐘供養があると聞き、舞にことよせてかつて男を隠した恨みの鐘に飛び入り、蛇体になって現れるが、押戻しによって屈服させられるという内容。蛇性の姪と言えば、『白蛇伝』の白娘子と『道

成寺』の清姫とともに名高いものである。『白蛇伝』と『道成寺』は伝説的世界から発展した劇としては、両方とも神話的意味を持っている。これと絡み合いながら、もう一つ仏教的モチーフも貫かれている。これにおいての両者の持っている共通の要素をみてみたいと思う。

まず、『白蛇伝』はもともと、仏教の伝導のための作品で、法海という「高德」の僧が白蛇の精に魅せられた許宣を法力によって、救おうとし、最終的には勝利を収めるという側面を備え、作品は人間と妖怪と仏教の三者の関係によって、構成されている。仏法は邪神が人を惑わすことを許さず、最終に勝つというのがその主旨である。変容の過程において、白娘子の妖怪の性質と恐ろしさがなくなり、自由と幸福とを追求するために、法海と闘う勇敢で、可憐な存在と変わった。他人の意見で、しょっちゅうフラフラしている許宣も白娘子との愛情を大事にし、法海和尚に「お前は妖魔に食われてしまいうぞ」と脅かされながらも、白娘子のもとへ帰る。法海は仏教の化身として、二人の仲をささこうとする冷酷さが憎たらしくなり、仏教においての合理性を有する「人と畜生は共にいてはいけない」という命題は疎かにされるようになってきた。それにもかかわらず、白娘子は最後、法海に雷峰塔の下に埋められる運命は変わっていない。これはあくまで、『白蛇伝』の「仏法無辺」の主旨、すなわち

仏教的モチーフによるものと見てもよいのであろう。

一方『娘道成寺』は女の嫉妬邪淫を描いた深刻なものから、無邪気な少女が父の冗談を信じたための恋慕として、我々の同情を誘うものとなり、作品も山伏（登場していないが）と白拍子と鐘の三者の関係により構成されている。仏教的モチーフが始終貫かれている。白拍子が登場し、四人の僧との会話の中に、次のセリフが出てくる。

白拍 色即是空、空即是色……鐘の供養は、

四人 廣大無辺、

ここでは、四人の僧が白拍子に「鐘の供養は廣大無辺」と教えているというよりは、むしろ、「仏法無辺」と戒めていると言っているのであろう。

恋に裏切られた女の悲しさ、尽きることのないその怨念の激しさを表現する白拍子の舞に伴う長唄に出てくる「諸行無常……生滅法……生滅滅已……寂滅為楽……」はいかにも、作品の仏教的モチーフにふさわしい唄であると思わせる。

白娘子が法海に「永久に世に出るな」と蛇の本身に戻され、雷峰塔の下に埋められた運命と同じく、白拍子は寺僧達の必死の祈りで蛇体と変り、日高川に飛び入る。これで、白娘子と白拍子のいわゆる恋に狂った女の執念が仏法により永遠に鎖されるようになった。

白娘子の大敵の法海と白拍子の恨みの鐘は作品の中で、いずれも、仏教的存在である。許宣は白娘子を埋めた塔の前で、頭を剃って僧となり、仏門に帰依したが、山伏は鐘の中で、蛇の毒気に焼き溶かされてしまう。ここから、更に『白蛇伝』と『娘道成寺』が同じく持っている「色即是空・空即是色」という女色の戒めに焦点を合わせた仏教的モチーフを見出すことが出来る。

（二）、『白蛇伝』と『蘆屋道満大内鑑』

『蘆屋道満大内鑑』は狐が人妻となった後、故郷へ帰って行くという劇化で、異類婚姻の物語として、日本の戯曲の上でも、特異な存在といえる。享保十九年書き下ろされた浄瑠璃で、作者は竹田出雲である。五段つづきの王代物で、全編の筋は、東宮の外戚左大将元方の叛逆に発する御家騒動であるが、眼目は葛の葉に化けた狐が安倍保名との間にもうけた一子が、陰陽師安倍晴明となるといふ。生い立ちの説き明かしにある。今も歌舞伎で始終上演される清元の「保名」は、保名が恋人の神の前が自殺したので、悲しみのあまり発狂し、その小袖を抱きしめながら信田の森をさまよい歩く振り事である。『大内鑑』（蘆屋道満大内鑑の略、以下同じ）は古浄瑠璃の「信太妻」を粉本としたものである。

『大内鑑』の少し前に、紀ノ海音が同じ題材を扱って「信太ノ森

女占い」という浄瑠璃を揃えている。『大内鑑』の今一つ前の創作物にあたって見ると、角太夫節の正本に、表題が「信太妻」というものがある。

狐は日本の昔話や伝説及び文学作品の中で極めて変化に富んだ行動をし、複雑な性格を持っている動物である。人間との交渉の主題は極めて古い。『大内鑑』は古浄瑠璃を粉本としたものであるが、これに類似したのは昔話の「狐女房」であろう。「恋しくば、たづね来てみよ、和泉なる信太の森の恨みくづの葉」。『大内鑑』でも、この名高く、いかにも狐らしい歌は同じく狐が逃げ去る前に残した書き置きである。「信太妻伝説は「大内鑑」が出ると共に、びつたり固定して、それ以後語られる話は、伝説の戯曲化された大内鑑を基礎にしている」と折口信夫が言っている。『大内鑑』の葛の葉以外の狐が人間との交渉は他に劇関係の物から言うと、河竹黙阿弥の脚本の「女化稻荷月朧夜」に出てくる。牛久沼の辺、水戸海道の途中にある女化原の伝説を仕組んだもので、筋の立て方は『大内鑑』に似ている。

異類婚姻譚として、著名な信太妻の伝承は十七世紀後半から、しばしば人形浄瑠璃や歌舞伎に取り上げられていたが、『大内鑑』はそれらを集大成した作品と言われている。

京劇と歌舞伎において、異類婚姻の物語の代表作として、『白蛇

伝』と『大内鑑』は類似点が見られるが、そればかりか、両者には肉面的な共通性を持っている。

まず、両者の文学性について見てみよう。

両者には同じく神話的モチーフが貫かれているとしても、我々が『白蛇伝』と『大内鑑』を面白いと感じるのは、そのためだけではなさそうである。その面白さは何といつても、先ず、筋の複雑怪奇、変幻自在な設定の仕方、また、蛇と狐——二人の美しいヒロインについて、感情も行動も人間と変わることなく、異類であることを忘れさせるところにある。さらには、これを逆転させ、『白蛇伝』と『大内鑑』の描く異類は初めから人間なのだ。

一層ロマンチックなものとするために、ヒロインを蛇とし、狐とし、超自然の雰囲気包み込んだと言いたい程である。

一例として、『白蛇伝』の一段——「断橋」、『大内鑑』の「安倍野機屋の場」（俗に「機屋」と呼んでいる）で、葛の葉狐が去る前の場面を取り上げる。

「断橋」

白娘子は万難を克服し、靈芝を盗み、許宣の命を救ったが、許宣は生き返って、金山寺へ線香をたてに行く。法海和尚の戒めに心を動かされ、家に戻らない。白娘子は青児を連れ金山寺まで法海に許宣を帰らせるように頼みに来る。断られ、仕方なく、水の精達を集

め、金山寺を水浸しにする。法海も天兵を呼び、白娘子と闘う。白娘子は妊娠のため、体力を減退し、断橋まで逃げて来る。許宣は「いまこそわかった」と金山寺から、断橋にやって来る。白娘子はこの時、もうすぐ分娩になる。許宣に向かって、許の裏切りを責めながら、許に対する愛情を捨てられない。心境を語って白娘子が歌うには、

訳——

妻の真情をば語り聞かせん。妻は俗世の女にあらず、もとは峨眉に住む蛇の精！ただ俗世を見んと、山を下り、小青と共に西湖の畔へ来たり。風雨の湖中に貴君を知りて、少年の忠厚くして、瀟洒なる様を愛す。紅樓に契を結び、春限りなきに、なんぞ良縁のわざわいなるを知らん。端陽の酒の後、汝が命は一線に懸り、我は仙山に草を盗みて、苦難嘗め尽す。たとえ類いは異なれど、我が情は浅からず、我が腹中には更に許家の男児有り。病治りて良心変ずとは、あるべからず、法海の底無し船に乗り行きぬ。汝の帰りを望めど、見るを得ず、五日五晩、待たぬ日のあらんや。憐むべし、涙は我が枕を遍く濡らし、憐むべし。我が鴛鴦の夢、醒めて、ただ愁いを増すのみ。汝を尋ね、金山の寺院に到るも、ただ夫婦のよき日を取り戻さんがため、もし小青の必死の戦い無くば、我が腹中の嬌児すら保ち難し。小青の怒るを怪しむことなかれ。誰が是か誰が非か、御

自分に問うて下さい。

「断橋」は『白蛇伝』の中で、特に波瀾に富んだ一段である。白娘子はこの歌の中で初めて、本心を夫に語る。

一方、戸板康二は『大内鑑』について、こう語っている。「……伝統が古いだけに、文学としても卓抜しているのである」^⑤。

葛の葉のせりふをみてみよう。

「安倍野機屋の場」葛葉　ア、恥ずかしや、あさましや。年月包みし甲斐も無う、おのれと本性顕わして、妻子の縁もこれぎりに、別れねばならぬ品となる。父御にかくと言いたいのが、互いに顔を合わせては、身の上語るも面伏せ。御身寝耳に聴き覚え、我は眞は人間ならず。六年以前信田にて、悪右衛門に狩り出され、死ぬる命を保名殿に助けられ、再び花咲く蘭菊の、千年近き、刺え我ゆえに、数カ所の手疵を受け給い、生害せんと給いし、命の恩を報せんと、葛の葉姫の姿と変じ、庇を介抱、自害を止め、夫の大事さ大切さ、殊におこを儲けしより、今別る、とも、父御前の業でもなく、もとより名をかり姿をかりし、葛の葉殿に、思はれども恨みはなし。眞の母と親しまば、手習い学問精出して、さすがは父の子ほどある。器用なものと褒められてたも。何をさせても埒あかぬ、道理よ、常々父御のお詞にも、虫けらの命を取る。碌なものにはなるまいと、たゞ仮初のお叱りも、母が狐の本性を受け継いだるが浅ましやと、

胸に釘刺すごとく、何ぼう悲しかりつるに、成人の後かならず、無益の殺生しやんな。せめてそなたの乳離れするまで、側に居て育てたいとは思えども、我が身の素性しれたれば、とてもこの家に長居はならず、夢みたような別れなれば、さだめて後では、乳をさがして泣くであろう。それが、しよせん泣いても返らぬこと、せめて名残りにたゞ一筆、そうじゃ、そうじゃ。これが別れか、ハア。

童子　母さんいもう。

葛葉　ねんねんころ、ねんねんこ。今が別れか、ハア、悲しやなア。

葛の葉の夫や子への断ち切りがたい情愛と、別れなければならぬ痛切な思いが、我々の涙を誘う。この場面は『白蛇伝』の最後に白娘子が法海に金鉢に埋められる前、夫や子への思いを「私は許宣に心を引かれ、ふらふらと恋慕の心やみがたく、ついに、天の掟を犯しましたが、人殺しはしていません。何とぞお慈悲を」と泣いて訴えるところと同工異曲である。

白娘子と葛の葉は心の赴くままに人間を愛し、別れには悲しみ、確かに人間と変わるところが無い。白娘子（蛇）が仙山で靈芝を盗んだり、葛の葉（狐）が出て危難を救ったり、妖異のものらしい超自然のエピソードは、時には花を添えることになる。『白蛇伝』と『大内鑑』の作者は白娘子と葛の葉を人間のように描きながら、決して、その素性を忘れてはいなかったと思われる。人間プラス異類

の魅力——この異類婚物語の独特の魅力に取つて変わるものがないであろう。この魅力は文学的に肉付けされたもの、いわゆる文学性から、生まれたと言っても、言い過ぎではなからう。

次に、両者のモチーフについて見てみたいと思う。

白娘子と葛の葉はいかにも人間らしく、時々異類であることを忘れさせるが、『白蛇伝』と『大内鑑』の作者はどこまでも人間でなく、「異類」を描いている。では、異類とはいったい何であろうか。人間とそっくりなのに、実は蛇だったり、狐だったりするとはどういうことであろう。白娘子と葛の葉の魅力は、その正体と結び付けることによって、首尾一貫したものとなった。『白蛇伝』と『大内鑑』は蛇と狐そのものの持つ魅力、とりわけ、その異類の性質を抜きにしては成立しない物語であろう。作者は普通の世話女房の情愛に重点を置き、異類と人間との愛情を描いているにもかかわらず、白娘子と葛の葉は影が濃く、心に残る存在である。普通の世話女房より、遙かに真実で、生き生きとした女の姿であると思える。作者は真実の女性の姿をとらえていると言つてよいであろう。異類の女性の身のこなしはどこまでも自由で、しなやかである。人間らしく自由に伸び伸び振る舞うためには、人間でないことが必要だったのであろう。『白蛇伝』と『大内鑑』の作者にとつて、人間は、それ程に不自由なもの、非人間的なこの世の仕組みにがんじがらめにな

つた存在と見えたのであろう。この束縛を脱しているという意味では、異類ほど「人間らしい」ものはないのである。

『白蛇伝』と『大内鑑』の最後の段を比べながら、ヒロインの「人間らしさ」を見てみよう。

『白蛇伝』の最後の段——「祭塔」では、白娘子は金山寺で法海和尚に負け、金鉢に収められ、雷峰塔の下に埋められた。数年後、その子——許仕林が大きくなり、立身出世し、「状元」になり、郷里に帰る。親のことを聞き、雷峰塔の前で、母を祭る。白娘子が現れ、姿を見せ、泣きながら往事を語る。その後また、悲しみながら別れる。その歌は、

訳——

涙は声に先立ち、仕林児、私の子よ、よくお聞き。……母さんは黒い雲につつまれた月、瓦の上にある霜で、日の出を待っている。母さんは切れた琴の糸、東海に流れた水のようにもう戻れないのだ。私の子が状元にうかったことは母さんの慰めだ。私の子が家族の光栄であるよう母さんは祈っている。

一方、『大内鑑』の最後の段——「信田の森の場」では、葛葉 誠の姿あらわして、お目にかゝるも恥ずかしけれど、コレ童子、よう聞きや。野干の子とて侮うる、な。身の上長く守るべし。名残りは尽きじ、はや、おさらば。

白娘子と葛の葉は自分の子供の前に、姿を現し、悲しみながら、本音を吐く。この別れる際の悲痛な叫びが哀れを感じさせ、「人間らしい」という言葉が窮屈に感じられる程である。白娘子と葛の葉の人間像こそ、我々の感情を呼び覚ますことができたのであろう。ある意味では、『白蛇伝』と『大内鑑』は同じモチーフを持つているといえよう。

三、まとめ

異類婚姻譚が中国と日本の古典文学とのそれぞれの関連についての考察を出発点にし、中国と日本のそれぞれの代表作、京劇『白蛇伝』、歌舞伎『蘆屋道満大内鑑』、更に、異類婚の範疇に入らないが、日本の近世文芸に相当影響を与えた特殊な存在、『白蛇伝』と共通の要素を持つ歌舞伎『娘道成寺』を取り上げた。この三つの作品の根底に横たわるのは、仏教的モラルを越えた愛情を宥める、あるいは人間と異類が幸せな家庭を築くといった破綻のない結末を取ることはあろうはずがない、という前提である。白娘子と葛の葉と白拍子はそれぞれ、本来の文学作品においてのそのイメージが戯曲の中で変えられた。白娘子と葛の葉は異類であり、白拍子は執心により異類に変身したにもかかわらず、同情を寄せられ、感動を覚えられ、ひたすらな愛を語るにふさわしい積極的な女性の姿で、舞台上に

定着できたのは何故であろうか、そのよってきたる理由を考えるに、それは、おそらくこのような話の担い手が民衆であり、天の掟とか、仏教的モラルに拘束されない、かなり自らの内的欲求に忠実な女性観が民衆の心底にあったがためであろう。人間社会における厚い封建の壁の中で、暮らしてき、束縛から脱け出したい民衆にとって、このほうがむしろ自然であったのである。

おわりに

単純な伝説と神話、いわゆる昔話から、古典文学作品における変容を経て、更に、戯曲において定着した異類婚は、中国と日本のそれぞれの文学土壌で、互いに違う色彩を色付けられながらも、共通しているところかなり多い。

異類婚姻譚が戯曲に残した足跡は極めて独特と言わなければならない。他の題材の作品に比べ、数的にそれほど多くないかもしれないが、独特なジャンルとして、戯曲文学に占める重要な位置を認めなければならない。

注

- ① 『日本古典文学大辞典』——岩波書店
- ② 『日本の古典と口承文芸』（婚姻譚としての住吉物語——物語文学と昔話）——関敬吾氏 有精堂

- ③ 『白蛇伝』序——田漢氏 中国戯曲出版社
- ④ 『能道成寺』——増田正造氏監修 平凡社
- ⑤ 『折口信夫全集』(第一卷)——中央公論
- ⑥ 『名作歌舞伎全集』(「芦屋道満大内鑑」解説)——戸板康二氏

参考文献

- 『京劇大観』——北京出版社
- 『京劇劇目字典』——中国戯劇出版社
- 『京劇史研究』——北京市戯曲研究所編 学林出版社
- 『中国戯曲芸術』——張籟生著 百花文芸出版社
- 『折口信夫全集』(第一卷)——中央公論
- 『日本昔話集成』第二部1、3——関敬吾著 角川書店
- 日本古典文学全集『古事記』
- 『日本靈異記』 岩波書店
- 日本古典大系『風土記』——岩波書店
- 『近世怪異小説研究』——太刀川清著 笠間書院
- 『搜神記』——千宝 竹田晃訳 平凡社
- 『日本昔話名彙』——柳田国男監修 日本放送協会
- 『名作歌舞伎全集』——戸板康二等監修 東京創元社
- 『歌舞伎全集』1、2 東京創元社
- 『日本の古典と口承文芸』——有精堂